

ヤスクニ・レポ 303

戦後 80 年に、戦後 50 年の JECA 戦責告白文書を読み直す

須田毅(JECA 西堀キリスト福音教会牧師)

教会人として、私は戦後 80 年をどう考えるか。私は JECA (日本福音キリスト教会連合) という、単立教会の連合体に属している(正確には、JECA に加盟する単立教会に属している)。加盟教会の 9 割以上が、第二次大戦後に欧米の宣教団体をルーツに生まれ、JECA という連合体が発足したのは 1992 年である。その戦後生まれの当団体もまた、1995 年には戦責告白「第二次世界大戦における日本の教会の罪責に関する私たちの悔い改め」(以後、「私たちの悔い改め」と略す)を作成した。

この「私たちの悔い改め」作成については、JECA 内でも苦言があったそうである。現実には第二次大戦の経験がほとんどない教会連合体が、自分の言葉でそれが出せるのか、と声があった。その声は、作成陣の自覚でもあったろう。「私たちの悔い改め」の主語の多くは、「私たち日本の教会」である。そして、悔い改めの内容としては、「国家神道体制の下で、天皇を現人神とする偶像礼拝の罪を犯し」と冒頭で語っている。それは、アジア諸国にまでそれを強要したこと、そしてアジア諸国で戦時下に犯した罪についても広範に述べている。そして、国内においては「加害者である日本の国と日本の人々に対しても預言者としての役割を果たせなかったという大きな罪責を負う」としている。JECA は直接の歴史体験を持たないが、その歴史を持つ日本のキリスト教会に連続する存在として、告白している。

戦時下の、日本のキリスト教会としての、信仰的な点と、アジア諸国を中心に戦争犯罪的な軍事行動の点を認めて、悔い改めとしている。これは当時には、戦時下の経験を持つ他教団教派の告白に無い領域に触れている点に、評価する外部の声もあったらしい。戦時の歴史をよく学んでの文章作成において、執筆陣とそれを支える各教会や委員会には、相当の祈りと時間が重ねられたことと覚える。この

「私たちの悔い改め」は、1997 年以後に JECA で牧師として働く中で、私にとって、平和や社会的課題を覚えるための、ひとつの資料となった。

「私たちの悔い改め」が JECA 内で共有されて、30 年が経過した。他教団教派同様、教会の悔い改めは、将来にわたって神と人に対して悔い改めの実を結ぶことを志すものである。そして、30 年前には神学生として、素朴にこの文書を受け取り学ぶだけの者であったが、今や JECA 加盟教会の牧師として、その実りを得るためのリーダーシップをとる立場である。果たしてこの悔い改めに立ち続けていたかどうか、吟味するならば、むしろ 1995 年以降に、自らの愚かさが重ねられていることを覚える。

「私たちの悔い改め」を一つの基準点として、この悔い改めに取り組んでいなかった点を、悔い改めなければならない。改めて「私たちの悔い改め」を読み返し、以後も課題とすべき点を以下のように覚える。

①「私たち日本の教会」としてこの告白を述べているということでは、JECA だけでなく、他教団教派の取り組みへの関心と敬意をもって、協力関係を構築しながら、JECA として課題と取り組むべきはずである。日本福音同盟を中心として他教団教派との関係性はあるが、更にそれを越えた戦時下の歴史を持つ諸教会の苦悩を、もっと現実的に知るべきである。それによって、戦時下の経験を持たない加盟教会が多い JECA として、課題に肉薄する努力を継続すべきではないか。そうでなければ、「私たち」という主語による告白主体は、告白の内容に背いてしまったままとなり、国家的社会的潮流に無自覚に巻き込まれる状態になってしまう。

②アジア諸国のキリスト教会や、戦争犯罪や戦争の悲惨を学び続けるべきではないか。韓国、中国、香港、台湾、インドネシア、ミャンマーなどの

教会の動きと社会的な動きにどれだけ私たちは関心をもっているのか。各地の民主化運動や軍事的圧政のカレントイシューは、大げさに言えば、第二次大戦時の歴史とも関係があることがほとんどではないか。当戦責告白では、アジア諸地域の日本軍による犠牲者に思いを致している。その歴史を引き継ぐと告白するならば、アジアへの関心を抱き続けねばならない。現在も日本人の中に潜むアジア蔑視を、日本のキリスト教会もアブリオリに持つことを強く拒否するために、悲惨な歴史に学び、積極的なアジア諸国関係の展望を抱く必要があろう。

③日本国内においても、日本のキリスト教会として、日本社会が神の義と聖に近くなるべく、祈りと務めを継続すべきである。日本のキリスト教会の中で、1974年の靖国神社国家護持法案が不成立となったあたりが、教会の対社会的関心の最大時期だったと言われる。その後は、関心は後退する一方である。1995年戦後50年に、少し、盛り上がりを見せた。しかし、それは、キリスト教会よりも、「50年」を意識した一般的な平和を求める声に、むしろ引っ張られた点があるのではないか。

「預言者としての役割」とは、神の言葉に基づいて平和や人権理解を訴えるべし、という強調かと考える。当巻頭言作成時は参議院選挙の直前であるが、キリスト者の信仰による政治理念を託せる政党が少数勢力になり、非福音的価値観から発する政治理念として個人的に受け止めざるを得ない政党と、様々な関係性を持つキリスト者・教会が存在するようになった。30年前と比較して、キリスト者の投票行動の型が崩れている。

選挙時などには、兄弟の迷いが解消されるべく、日頃から信仰的・神学的な政治的アプローチができるような牧会伝道をしなければならない。諸課題において、創造論・救済論・終末論などの神学的骨格をもった説教をしなければ、信徒の立場としては、現実に対して信仰的な判断をする根拠を持ちえない。聖書信仰に立つ信仰者と共に牧師たちが、聖書に固執した神学的思索と言動をもって、現実の社会を理解するガイドの任務を、意識しなければならない。自戒を込めて言えば、牧師としては自らの弱点であるが、弱点のままとならないよう日常的努力が必要である。

2025年6月20日例会奨励「父・御子・御霊」ヨハネ 16:12-15

柴田智悦師(同盟・横浜上野町教会牧師)

6月15日は、ペンテコステの1週間後、「三位一体主日」でした。アドベントからペンテコステまでの主の半年が終わり、次のアドベントに至る教会の半年が始まりました。その最初の主日に、私たちは御父と御子と御霊の三位一体の神である主を礼拝し、その信仰を証します。

ペンテコステにご聖霊を受けた弟子たちが教えられたことは、十字架の真理でした(ヨハネ 16:8-11)。実は私たちは、ご聖霊をいただくまで、本当の意味で罪について知ることはできません。それは、イエス様にある本当の義を知らないからです。ですから、イエス様を信じない人には、まだ本当の罪もわかっていないのです。決して到達しない人間の本当の罪深さと、その罪深い者をさえ赦す十字架の真理があります。その主の愛に逆らう罪こそが最大の罪です。ご聖霊はこの十字架のイエス様を証しておられ、そのイエス様を信じて受け入れる者に信仰をお与えくださるお方なのですから、そのお方を拒んでしまったら、どうしてイエス様を信じて罪を赦され救われることができるのでしょうか(マタイ

12:31、32、ヨハネ 3:18)。

ご聖霊は神である主と一つであるお方です。つまり、神ご自身が、私たちの心の最も奥にまで入って来られ、ご自身を告げてくださるのです。それがペンテコステの祝福です。そしてご聖霊の第一の働きはイエス様のご栄光を現すことです。ですから、御霊をいただいている私たちも謙遜にこのお方に従うなら、イエス様のご栄光を現すことを第一にします。そして、イエス様のご栄光とは御父のご栄光に他なりませんから、御霊が働かれる時、御父と御子のご栄光が現され、三位一体の神である主が明らかにされるのです。ですからイエス様は、ご自分が去った後にご聖霊を遣わされることこそが弟子たちにとって益となるのだと言われました。

人の思いや判断を越えたところにある主の平安があります(ピリピ 4:6, 7)。謙遜にされ、ご聖霊に従いやすい者にされ、私の思う平安ではなく、主ご自身からの平安をいただき、イエス様のご栄光を現す者とならせていただきます。